LHCにおけるジェットイベントを用いた トップパートナー再構成

東大宇宙線研究所 竹内道久



標準模型は素粒子の相互作用をよく記述することが、 LEP, Tevatron, B-factory実験, HERA等々で検証されてきた

ヒッグスはみつかっていないが、 質量が100GeV程度であれば 精密実験の結果と良く合う

 $m_H > 114.4 \,\text{GeV} \,(\text{LEP})$ $m_H < 182 \,\text{GeV} \,\text{at} \, 95\% \,\text{C.L.}$



問題点: 1.ヒッグス質量項の輻射補正の2次発散の問題

2.ダークマターの存在の問題

ニュートリノ振動があることも、標準模型の問題であるが、 右巻きニュートリノを入れるととりあえずは解決する



1. ヒッグス質量項の輻射補正の2次発散の問題
(なぜヒッグスはこれほど軽そうなのか)
$$m_h^2 = m_{h0}^2 + \delta m_h^2 \sim 10^4 (\text{GeV})^2$$
 $m_H > 114.4 \text{ GeV} (\text{LEP})$
 $m_H < 182 \text{ GeV} \text{ at } 95\% \text{ C.L.}$
 $\delta m_h^2 \sim \frac{\pi}{t}$ $t^{-\frac{3}{4\pi}} y_t^2 \Lambda_{\text{SM}}^2$
標準模型が $M_{\text{Pl}} = 10^{19} \text{GeV}$ $\delta m_h^2 \sim -\frac{\lambda^2}{(4\pi)^2} \Lambda^2 \sim 10^{36} (\text{GeV})^2$
まで有効な場合 if $\Lambda_{\text{SM}} = 1 \text{ TeV} \delta m_h^2 \sim 10^4 (\text{GeV})^2$
TeVに新しい物理の存在





問題点: 1.ヒッグス質量項の輻射補正の2次発散の問題

2.ダークマターの存在の問題



LHCで到達可能

新しい問題:3.標準模型からのずれが精密実験でほぼ見えていない



問題点: 1.ヒッグス質量項の輻射補正の2次発散の問題 2.ダークマターの存在の問題

3.標準模型からのずれが精密実験でほぼ見えていない

● ヒッグスセクターに2次発散を防ぐ 新しい対称性

カイラル対称性 超対称性(SUSY) ボソンセクターにも フェルミオンセクターの構造を拡張

グローバル対称性 Little Higgs models ヒッグスはNGボソンである

● ダークマターの安定性を保証する Z2パリティ構造

Rパリティ、Tパリティ

標準模型粒子に対応するパートナーの存在(トップ、ゲージボソン) 最も軽いZ2パリティ奇粒子は安定でDMの良い候補 相互作用vertexは常に偶数個のパリティ奇粒子 ➡ 対生成・カスケード崩壊



超対称粒子の相互作用の結合定数は標準模型のものでほぼ決まっている

Spin 0	Spin 1/2	Spin 1	
$ ilde{u}_L, ilde{u}_R$	u_L, u_R		R parity odd な粒子 対生成
$ ilde{d}_L, ilde{d}_R$	d_L, d_R		SUSYが破れていなければ、パート
$ ilde{ u}_L$	$ u_L$		ノー松丁向工は向し貝里。
$ ilde{e}_L, ilde{e}_R$	e_L, e_R		$\widetilde{W^{\pm}}, \widetilde{H}^{\pm} \to \widetilde{\chi}_1^{\pm}, \widetilde{\chi}_2^{\pm}$
	$ ilde{g}$	g	$\tilde{W}^3, \tilde{B}, \tilde{H}^0_1, \tilde{H}^0_2 \rightarrow \tilde{\chi}^0_1, \tilde{\chi}^0_2, \tilde{\chi}^0_3, \tilde{\chi}^0_4$
H^{\pm}	$\tilde{\chi}_1^{\pm}, \tilde{\chi}_2^{\pm}$	W^{\pm}	
h, H^{0}, A^{0}	$\tilde{\chi}_1^0, \tilde{\chi}_2^0, \tilde{\chi}_3^0, \tilde{\chi}_4^0$	Z,γ	ゲージーノ質量(スカラー質
Soft SUS	Y hreaking na	rameters	$(M_3 > M_2 > M_1) \qquad (\overline{m_Q} \sim m_u \sim m_d > m_L > m_e)$
$-\frac{1}{2}(M_{3}g)$	$g + M_2 W W$	$' + M_1 I$	BB + h.c.
$-\tilde{ ilde{Q}}^{\dagger}\mathrm{m}_{\mathbf{Q}}^{2}\hat{\zeta}$	$ ilde{Q} - ilde{L}^\dagger \mathbf{m}_{\mathbf{L}}^2 ilde{L}^{\dagger}$	$-~ ilde{u}^{c\dagger} { m m}_{ m u}^2$	$\tilde{u}^{c} - \tilde{d}^{c\dagger} \mathbf{m}_{d}^{2} \tilde{d}^{c} - \tilde{e}^{c\dagger} \mathbf{m}_{e}^{2} \tilde{e}^{c}$ (ヒッグスポテン シャルに直接関係
$-m_{H_u}^2 H_u^\dagger$	$H_u - m_{H_d}^2 H_u$	$H_d^{\dagger}H_d - 0$	$(B\mu H_u H_d + h.c.)$
$-(\tilde{u}^{c\dagger}\mathbf{a_u}\hat{c})$	$\tilde{Q}H_u - \tilde{d}^{c\dagger} \mathbf{\ddot{a}_d}$	$\tilde{Q}H_d - \tilde{d}$	$\tilde{e}^{c\dagger} \mathbf{a}_{\mathbf{e}} \tilde{L} H_d + h.c.$).

典型的な質量スペクトル 100 程度の Soft SUSY breaking parameter を決めれば、質量スペクトルは決定する。 mSUGRA ┣━━ 簡単のため 5 つのパラメータ SPS 1a $m_0, m_{\frac{1}{2}}, A_0, \tan\beta, \operatorname{sgn}\mu$ at M_{GUT} 600500 $M_1 \sim 0.4 m_{1/2}, M_2 \sim 0.8 m_{1/2}, M_3 \sim 2.8 m_{1/2},$ $m_3^2 \sim m_0^2 + 6m_{1/2}^2, m_2^2 \sim m_0^2 + 0.5m_{1/2}^2,$ $m_1^2 \sim m_0^2 + 0.15 m_{1/2}^2$ at M_Z 300200 $\tan\beta$ A_0 $\operatorname{sgn}\mu$ m_0 $m_{1/2}$ 100 100 250 -100 10.0 +



質量スペクトルが決まると、相互作用も決まっているので、 崩壊パターンやその分岐比が計算できる。



2.2 Littlest Higgs model with T-parity

Littlest Higgs model with T-parity N. Arkani-Hamed, A.G. Cohen, E. Katz, A.E. Nelson ヒッグスは擬NGボソンである。 JHEP 0207:034,2002. hep-ph/0206021 ゲージ理論だが、ゲージカップリングを全て0にした極限では $SU(5) \xrightarrow{\Sigma_0} SO(5)$ Global sym. 自由度 24 → 10 $(1_0, 3_0)$ $2_{\pm 1/2}, 3_{\pm 1}$ ゲージカップリングは 2 set $(g_2, g_1), (g'_2, g'_1)$ NGボソン $[SU(2) \times U(1)]^2 \rightarrow SU(2)_L \times U(1)_V$ 一部をヒッ 1 setだけ0にした極限では、グローバル対称性が一部回復する グスと見なす $SU(3) \rightarrow SU(2) \times U(1)$ 自由度 8 → 4

Littlest Higgs model with T-parity

N. Arkani-Hamed, A.G. Cohen, E. Katz, A.E. Nelson ヒッグスは擬NGボソンである。JHEP 0207:034,2002. hep-ph/0206021



2 setのカップリング両方が寄与しないと、ヒッグスは厳密なNGボソンとなり質量は0 1 つのカップリングが寄与するダイアグラムによる質量補正は0

質量に対する補正は2ループから

Littlest Higgs model with T-parity

N. Arkani-Hamed, A.G. Cohen, E. Katz, A.E. Nelson ヒッグスは擬NGボソンである。JHEP 0207:034,2002. hep-ph/0206021



2 setのカップリング両方が寄与しないと、ヒッグスは厳密なNGボソンとなり質量は 0 1 つのカップリングが寄与するダイアグラムによる質量補正は 0



Top-partner <u>h</u> + <u>h</u> Log発散 トップセクターにも同じ構造 トップにパートナーができる T_+





強い相互作用をする

LHCで対生成イベント

T-parity

treeレベルの寄与を消す トリプレットのVEVを禁止する







問題点: 1.ヒッグス質量項の輻射補正の2次発散の問題

2.ダークマターの存在の問題

3.標準模型からのずれが精密実験でほぼ見えていない





1.標準模型の問題点

2.標準模型を超える模型(MSSM,LHT)

3.LHC実験

4.LHT模型におけるトップパートナー再構成
5.mSUGRA模型における スクオーク、グルイーノの質量測定
6.まとめ

3. LHC実験(2008年~)

- スイス(フランス)のCERNで行われる陽子・陽子コライダー実験
- 円周 2 7 k mのリング(山手線くらい) (1232個の双極子磁石と392個の四重極磁石)
- B子ビームの強さは ブTeV (今までの7倍)



TeV領域の物理を観測する ための検出器は2つある。 ATLAS, CMS

LHC実験(2008年~)

- スイス(フランス)のCERNで行われる陽子・陽子コライダー実験
- ・ 円周27kmのリング(山手線くらい) (1232個の双極子磁石と392個の四重極磁石)
- ・ 陽子ビームの強さは $\frac{5 \text{ leV}}{7 \text{ teV}(\phi}$ までの 7 倍) 重心系エネルギー $\sqrt[3]{s} = \frac{10}{14}$ TeV



LHC実験(2008年~)

- スイス(フランス)のCERNで行われる陽子・陽子コライダー実験
- 円周27kmのリング(山手線くらい) (1232個の双極子磁石と392個の四重極磁石) 5TeV
 陽子ビームの強さは 7TeV(今までの7 重心系エネルギー √s = 14 TeV





クオークは粒子の種類をほとんど区別できない(ぎりぎりbクオークが60%できるか)

どうやって検出するか

- Stable particles: p, p̄, e[±], γ
- Quasi-stable particles (τ > 10⁻¹² s): n, Λ, K⁰_L, ..., μ[±], π[±], K[±], ...
- Particles with displaced vertex (τ ~ 10⁻¹² s):
 B^{0,±}, D^{0,±}, τ[±], ...
- Short-lived particles (τ < 10⁻¹³ s): π⁰, ρ^{0,±}, ..., Z, W[±], t, H, ...
- Missing particles: ν, χ˜⁰₁, A_H, G_{KK}, ...







LHCでは、SM プロセスも桁違いに大量に生成される。

ハドロンコライダー



x, y 軸方向の運動量は z-軸方向のブーストに対して不変な
量

$$p_T \equiv \sqrt{p_x^2 + p_y^2}$$
 が重要な観測量
 $p_T(\theta) = p_0 \sin \theta \quad dp_T = p_0 \cos \theta \, d\theta$.

SUSY event と SM event の区別 SMプロセスも大量につくられる。 $Z, W^{\pm}, tt, bb, ...$ この中から、SMを超えるシグナルを見つけ出す必要がある。





2 つの LSP が最終的に作られ 観測できない。 大きな missing momentum 母_T ≡ | ∑_{visible} p_T | sparticleが作られると、標準模型粒子を放 出しつつカスケード崩壊する。

大きな Effective mass $M_{\text{eff}} = E_T + p_{T,1} + p_{T,2} + p_{T,3} + p_{T,4}$.

LHCのmSUGRA発見能力



- $E_T > \max(200 \text{GeV}, 0.2 M_{\text{eff}}).$
- at least 4 jets with $p_T > 50$ GeV.
- $S_T > 0.2$.



Leptonを使った解析

新粒子の質量が1.5TeVより軽いなら、<mark>1fb¹</mark> でdiscoveryは可能

質量スペクトルが測りたい

SUSY events をSM eventsから分離できれば、 イベントを集めて統計的に解析することで、質量スペクトルを測定できる カスケード崩壊の運動学の制限を使って、質量スペクトルを決め



レプトンが出る崩壊はゴールデンチャンネルと呼ばれる(SMBGも少ない)



この量はLorenz inv. なので、 $ilde{\chi}_2^0$ が止まってなくてもこの関係は成り立つ



しかし、高統計が必要(100fb¹)

Leptonを使った解析のまとめ

ゴールデンチャンネル $ilde{\chi}^0_2 o ilde{\chi}^0_1\ell^+\ell^-$ がとても重要

分岐比は一般に小さいので、高統計が必要

不変質量のエンドポイントを使う

二つの崩壊チェーンのうちの一つの崩壊チェーンを用いる

Missing transverse 運動量 はカットにしか使っていない

研究の動機

新粒子の質量が1.5TeVより軽いなら、 SUSYならdiscovery は <mark>1fb⁻¹</mark> で可能。

レプトンチャネルを用いた質量測定は確立している(崩壊チェーンを構成していく)

しかし、レプトンチャンネルの解析は、統計的に不利 初期の解析には向かない。



ジェットイベントを使う解析は統計的に有利

● トップパートナー対生成から生じるトップ−反トップ系の再構成 再構成した運動量を用いたトップパートナーの質量測定

4. LHT模型でのトップパートナー再構成

 $pp \to T_-\overline{T}_- \to t\bar{t}A_HA_H \to bW^+\bar{b}W^-A_HA_H \to 6j + E_T.$

トップの再構成 トップパートナーの質量の測定 トップの偏極の測定

ジェット再構成アルゴリズムの比較研究







Event selection	Mass spectrum			
	$m_{T_{-}}$ A_{H} m_{t}			
イベントは HERWIG6.5を使って 50fb ⁻¹ 生	成 Point 800.19 151.79 175.00			
Summary of Cuts				
$\not\!$	一般的な SM イベントを落とすカット			
$n_{\text{lepton}} = 0$	トップのセミレプトニック崩壊をカット			
$p_{T,H_1}, p_{T,H_2} > 200 \text{GeV}.$ $(p_{H_j} \equiv \sum_{i \in H_j} p_i)$	トップがブーストしていることを要求 (ttbarの寄与を落とす)			

	standard	$p_{H_{*}} > 200$	$m_{P_{H1}} \sim m_t$	$m_{P_{H2}} \sim m_t$	both	or	$m_{T2}>350$	$m_{T2} > 500$
$T_{-}\overline{T}_{-}(\text{signal})$	2,764	1,675	404	396	130	398	372	199
$t\bar{t}$ +jets	34,906	12,296	2,114	1,288	241	1,230	192	0
$t\bar{t}Z(\rightarrow\nu\bar{\nu})$	337	95	16	24	5	19	3	3
$Z(\rightarrow \nu \bar{\nu}) + \text{jets}$	26,290	8,676	520	890	50	420	280	10
$W(\rightarrow l\nu)$ +jets	24,045	7,780	465	700	55	285	140	10



f



f

MT2 を使ったトップパートナーの質量測定

 m_{T2} variable を使って質量を測定する

 $\zeta\zeta \to (a\alpha)(b\beta)$ $T_{-}\overline{T}_{-} \to (tA_{H})(\overline{t}A_{H})$ proton f(z) f(z)

$$M_{T2} \ \mathcal{E} 使 \circ \mathcal{L} h \vee \mathcal{O} \cap \mathcal{H} - h + \mathcal{H} - \mathfrak{O} \ \mathcal{G} \subseteq \mathbb{R} \mathbb{R}$$

$$m_{T2} \text{ variable } \mathcal{E} \oplus \circ \mathcal{T} \oplus \mathbb{G} \oplus \mathbb{R} \oplus \mathbb{R}$$

$$\zeta \to (a\alpha)(b\beta)$$

$$T_{-}\overline{T}_{-} \to (tA_{H})(\overline{t}A_{H})$$
1.まずは m_{T} とい
う量を考える
これは、2つの粒子の pt
 $o_{\mathcal{A}} \circ \mathbb{C} \mathbb{E} \oplus \mathbb{R}$

$$p_{T} = (p_{x}, p_{y}, 0) \qquad E_{T} = \sqrt{|\mathbf{p}_{T}|^{2} + m^{2}}$$

$$m_{T}^{2}(\mathbf{p}_{T}^{a}, \mathbf{p}_{T}^{a}; m_{\overline{\chi}_{1}^{0}}) \equiv m_{a}^{2} + m_{\overline{\chi}_{1}^{0}}^{2} + 2[E_{T}^{a} \mathcal{H}_{T}^{\alpha} - \mathbf{p}_{T}^{a} \mathcal{P}_{T}^{\alpha}] \\ = (p_{a} + p_{\alpha})^{2} = m_{\zeta}^{2}$$







MT2 を使ったトップパートナーの質量測定



MT2 を使ったトップパートナーの質量測定



MT2 を使ったトップパートナーの質量測定

今、2つのヘミスフィアの運動量をつかって mt2 分布を見ると、

 $(A_H$ の質量は正しいものがわかっているとして)

Endpoint ~ 800 GeV





$$m_{T2}^{2}(\mathbf{p}_{T}^{a}, \mathbf{p}_{T}^{b}, \mathbf{p}_{T}; m_{\tilde{\chi}_{1}^{0}}) \equiv \min_{\mathbf{p}_{T}^{\alpha} + \mathbf{p}_{T}^{\beta} = \mathbf{p}_{T}} \left[\max\left\{ m_{T}^{2}(\mathbf{p}_{T}^{a}, \mathbf{p}_{T}^{\alpha}; m_{\tilde{\chi}_{1}^{0}}), m_{T}^{2}(\mathbf{p}_{T}^{b}, \mathbf{p}_{T}^{\beta}; m_{\tilde{\chi}_{1}^{0}}) \right\} \right] \leq m_{\zeta}^{2}$$

$$transverse \mathbf{x} \mathbf{a} \mathbf{y} \mathbf{z} \mathbf{z} \mathbf{x} \mathbf{x} \mathbf{x} \mathbf{y} \mathbf{z} \mathbf{z} \mathbf{z} \mathbf{z} \mathbf{z} \mathbf{z}$$

親粒子の質量がendpoint となる。

MT2 を使ったトップパートナーの質量測定

今、2つのヘミスフィアの運動量をつかって mt2 分布を見ると、

 $(A_H$ の質量は正しいものがわかっているとして)

Endpoint ~ 800 GeV







親粒子の質量がendpoint となる。

LHTでのトップの偏極

$$\mathcal{L} = i\frac{2g'}{5}\cos\theta_H \overline{T}_- A_H (\sin\beta P_L + \sin\alpha P_R) t$$
 $\sin\alpha \simeq \frac{m_t v}{m_{T_-} f}$, $\gg \sin\beta \simeq \frac{m_t^2 v}{m_{T_-}^2 f}$
 T_- の崩壊からきたトップは右巻きに偏極
偏極を調べることは相互作用の決定に重要
トップは完全に右巻きに偏極と仮定 (helicity = +).
b は massless. (bL のみ作られる)
Polarized top decay Gordon L. Kane, G.A. Ladinsky, C.P. Yuan PRD45(1992)
 $t_R \rightarrow b_L W_{0,-}^+ \rightarrow b_L (jj)_{0,-}$

b-ジェット分布



$$\beta = \frac{m_t^2 - m_W^2}{m_t^2 + m_W^2}$$
$$E_b = \frac{m_t^2 - m_W^2}{2}$$

$$-\frac{1}{2m_t}$$

3 ジェットイベントだけを用いた



ジェットレベルの分布



ジェット再構成アルゴリズムの比較

ジェットとは CDから予言されるように多数の同じ方向に飛ぶ粒子になる



$$p_a^2 \equiv t = 2E_b E_c (1 - \cos \theta)$$
$$Q^2 = t_0 > t_1 > t_2 > \dots > t_n$$
$$\theta_1 > \theta_2 > \theta_3 > \dots > \theta_n$$



ジェットとは CDから予言されるように多数の同じ方向に飛ぶ粒子になる







ジェットとは CDから予言されるように多数の同じ方向に飛ぶ粒子になる







アルゴリズムがジェット再構成アルゴリズムである

ジェットとは、 CDから予言されるように多数の同じ方向に飛ぶ粒子になる



 $p_a^2 \equiv t = 2E_b E_c (1 - \cos \theta)$ $\theta_1 > \theta_2 > \theta_3 > \ldots > \theta_n$

コーンアルゴリズム $\Delta R = \sqrt{(\eta_1 - \eta_2)^2 + (\phi_1 - \phi_2)^2}$

ある方向からの一定角度の範囲(コーン)の 中にパートンシャワーが起き、元のパートン のエネルギーの大半が入ることを使う

⊿R = 0.4が標準的

クラスタリングアルゴリズム



パートンシャワーを起こす際、枝分かれが進むほど virtuality が小さくなる

先へ行くほど角度が小さいかエネルギーが弱い

 $t = 2E_b E_c (1 - \cos \theta)$

コーンアルゴリズム

⊿R = 0.4が標準的 $\Delta R = \sqrt{(\eta_1 - \eta_2)^2 + (\phi_1 - \phi_2)^2}$

コーンが重なった場合の振る舞いは悪い。三日月形になったりする<mark>Acerdet</mark>



改良案:先に収束するコーンを全て見つけておく。 重なったら後で1つにくっつけるか2つに分けるか考える

しかし、粒子をSeedとしてコーンを作ると、収束する解が全て見つかるとは限らない。 IR safeでない:ソフトなアクティビティが加わると変化する場合がある。



クラスタリングアルゴリズム	
パートンシャワーを起こす際、枝分かれが進むほ virtuality が小さくなる	ど
kt アルゴリズム 先へ行くほど角度が小さいかエネルギーが弱い	
セルのペア (i , j) 全てについて次の量を計算 (Rはコーンサイズに対応する)	XXX
$egin{array}{rcl} d_{kB}&=&p_{Tk}^2, & d_{lB}=p_{Tl}^2, & R_{kl}^2=(\eta_k-\eta_l)^2+(\phi_k-\phi_l)^2\ d_{kl}&=&\min(p_{Tk}^2,p_{Tl}^2)R_{kl}^2/R^2 \end{array}$	X X X X X X X X X X X X X X X X X X X
d_{kl} が最小のものから合わせて一つの粒子としていく。	
この中で最小のものが d_{kB} ならその運動量をジェットとする。	6 6
弱いアクティビティーを近くの強いアクティビティーにくっつけていく $\frac{x}{Q^2}$ $\frac{c}{t_1}$ $\frac{c}{t_2}$ $\frac{c}{t_3}$ $\frac{c}{t_3}$	t_n
問題点:ptが小さい場合には、かなり遠くのアクティビティーも拾ってしまう(S	plash in)
Cambridge アルゴリズム	
先へ行くほど角度が小さい $d_{kB}=1, d_{lB}=1, d_{kl}=R_{kl}^2/R^2$	IR safe

ジェットの定義を変えると、測定結果が変わるため4つを比較した

ジェットの数の分布

 $pp \to T_-\overline{T}_- \to t\bar{t}A_HA_H \to bW^+\bar{b}W^-A_HA_H \to 6j + E_T.$

R = 0.4	Cambridge	SISCone $R = 0.4$			
	R = 0.4	f = 0.5	f = 0.75	f = 0.9	
1 jet	9	103	58	41	
2 jet	244	429	413	362	
3 jet	511	295	324	362	
4 jet or more	36	5	15	23	
total	800	832	810	788	
D = 0.2	Cambridge	SIS	Cone $R =$	0.3	
R = 0.3	Cambridge $R = 0.3$	SIS f = 0.5	$\frac{\text{Cone } R =}{f = 0.75}$	$0.3 \\ f = 0.9$	
R = 0.3 1 jet	$\begin{array}{c} \text{Cambridge} \\ R = 0.3 \end{array}$	$\frac{\text{SIS}}{f=0.5}$	$\frac{\text{Cone } R =}{f = 0.75}$	$0.3 \\ f = 0.9 \\ 12$	
R = 0.3 $1 jet$ $2 jet$	$\begin{array}{c} \text{Cambridge} \\ R = 0.3 \end{array}$	SIS = 0.5 51 335	$\frac{\text{Cone } R =}{f = 0.75}$ $\frac{16}{294}$	$0.3 \\ f = 0.9 \\ 12 \\ 235$	
R = 0.3 $1 jet$ $2 jet$ $3 jet$	Cambridge R = 0.3 2 138 574	SIS f = 0.5 51 335 419	Cone R = f = 0.75 16 294 430	$ \begin{array}{r} 0.3 \\ f = 0.9 \\ 12 \\ 235 \\ \overline{462} \end{array} $	
R = 0.3 $1 jet$ $2 jet$ $3 jet$ $4 jet or more$	Cambridge R = 0.3 2 138 574 85	SIS f = 0.5 51 335 419 36	Cone $R = f = 0.75$ 16 294 430 55	$ \begin{array}{r} 0.3 \\ f = 0.9 \\ \hline 12 \\ 235 \\ 462 \\ 71 \\ \end{array} $	

 $m_{P_H} \sim m_t$ であるヘミスフィア のうちジェット数に よって場合分けした 数

SISConeで、3ジェッ トイベントになる数が 多くなるようにTune してもCambridgeほど 良くならない。

ktやCambridgeの方がoverlapしたジェットの内部構造を調 べるのには適する アンダーライングイベントの影響



コーンサイズを0.4から0.7まで変化させた。黒がCB赤がKT アンダーライングイベントのない場合、KTとCBの振る舞いは似ている。

KTはアンダーライングイベントを多くとってきやすい。ピーク位置が175GeVから上にずれる。

まとめ

ブーストしたトップをヘミスフィアアルゴリズムでまとめることができた MT2分布から、トップパートナーの質量を測定した

bジェット分布から、トップの偏極の有無の違いが測定可能

オーバーラップのあるイベントなど、ジェットの内部構造を調べるには、 クラスタリングアルゴリズムの方が良い。 コーンアルゴリズムでは限界がある

アンダーライングイベントを考慮すると、Cambridgeが最も良い。

正しいジェットアルゴリズムを選ぶことや、その依存性などを理解することが重要



- 標準模型の諸問題を考えると、TeVスケールを記述する 模型はパートナー、ダークマターを持つ
- LHCでのシグナルは似ている
- LHCの初期段階において、標準模型を超える粒子の質量の測定には、ジェットイベントを効率よく用いたい
- ジェットの理解、正しいアルゴリズムの選択なども重要
- 現実的な標準模型バックグラウンドを想定